

プログラム・ノート

奥田佳道

ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)：弦楽四重奏曲選

ウイーン古典派の「パパ」ハイドンならではの歯切れのいい語り口、緩急の対比も鮮やかな様式美は、ボヘミアのカール・モルツィン伯爵に仕え始めた1750年代後半に育まれ、ハンガリー系のパウル・anton・エステルハージ侯ならびにその弟ニコラウス・ヨーゼフ・エステルハージ侯のもとで宮廷副楽長・楽長を務めた1760年代中葉以降に完成の域へと向かう。幼少期をハプスブルクの帝都ウイーンで過ごし、かのシュテファン大聖堂の聖歌隊メンバーでもあったハイドンだが、彼の言葉を借りれば「世の中から隔絶された環境に置かれたゆえ、私の音楽は独創的にならざるを得なかった」のである。

当初ディヴィエルティメントと呼ばれていたハイドンの弦楽四重奏曲は、偽作や編曲を除くと都合68曲を数える。パリやウイーンでは正規のルートによらない、いわゆる海賊版の楽譜が1760年代の半ばから出回っていたという。エステルハージ家のカペルマイスター（楽長）としてウイーン近郊で創作に勤しんでいたハイドンは、私たちが漠然と思い描く以上に早い段階からこのジャンルの匠だった。

1770年代以降、作品9、17、20、33など「6曲セット」での出版が開始される。この「6曲セット」という古典の流儀は、モーツアルトのハイドン・セット、ベートーヴェン最初の弦楽四重奏曲 作品18にも受け継がれる。

I 6月22日(火) 19:00開演

初日の一曲目、第30番 二長調 Hob. III:30は、1772年に出版された作品17の6曲目。プレスト～メヌエット～ラルゴ～アレグロの楽章から成る。これ、古典のセオリーと逆の緩急ではないか。ハイドン一流のユーモアに驚く。

1788年に創られた第57番 ト長調 Hob. III:58は、エステルハージ宮廷楽団のヴァイオリニストで、後に音楽出版でも名を成すヨハン・トースト(1759～1831)ゆかりの名曲。第4楽章の遊び心はまさにハイドンならではの世界。

第4楽章の冒頭が馬の駆け足ギャップ風ゆえ「騎手」と呼ばれるようになった第74番 ト短調 Hob. III:74は、晩年のハイドンをロンドンに招いたザロモンの勧めで書かれたか。1793年に作曲されたこの曲、第1楽章冒頭のユニゾンからして創意工夫と躍動感に富み、聴き手を魅了してやまない。ハイドン存命中から人気曲で、第2楽章の調べは、作曲者自身または第三者により『ピアノのためのアダージョ ホ長調』に編曲されたほど。アッポニー伯爵に献呈された6曲の弦楽四重奏曲のひとつである。

II 6月24日(木) 19:00開演

第二夜の開演を彩るのは、チェロによって歌われる冒頭主題も終楽章のフーガも素晴らしい**第32番 ハ長調 Hob. III:32**。劇的かつ深淵なユニゾンで始まり、カンタービレに至る第2楽章の凝った創りは、ハイドン弦楽四重奏芸術の白眉かもしれない。

1772年に書かれた後、ロンドン、パリ、アムステルダムで作品20として出版された6曲セットのひとつ。アムステルダム版の表紙に太陽が描かれていたことから、曲想とは関係なく作品20は「太陽四重奏曲」と呼ばれる。同曲集の自筆譜を大切に所有していた作曲家がいる。誰であろうブームスである。ウィーン楽友協会のディレクターも務めたブームスは、同協会アルヒーフ(古文書資料館)の館長でハイドン研究の泰斗だったカール・フェルディナント・ポール博士(1819~87)と親友だった。

盟友トーストゆかりの**第60番 イ長調 Hob. III:60**は、アレグロ~アダージョ・カンタービレ~メヌエット~ヴィヴァーチェと型通りの4楽章構成だが、そこは機知に富んだハイドン。第1ヴァイオリンの技を際立たせつつ、曲全体に意表をつく楽想を配した。独特の軽み、疾走感も大いなる魅力となる。

味わい深い第2楽章ラルゴ：カンタービレ・エ・メストゆえに「ラルゴ」という愛称がついた**第79番 ニ長調 Hob. III:79**は、ハンガリーのエルデーディ伯爵の依頼で創られた「エルデーディ四重奏曲」作品76 全6曲のひとつ。精緻な調べが駆け巡る終楽章も素晴らしい。

III 6月26日(土) 19:00開演

第三夜は愛称をもつ3曲。まず、フェルマータやゲネラルパウゼ(全休止)を駆使した第4楽章のエンディングから「冗談」と呼ばれる**第38番 変ホ長調 Hob. III:38**。ハイドンはこのプレストの終楽章にアダージョも添えた。遊び心満点だ。1781年に書かれ、ロシア大公パーヴェル1世に献呈と記された作品33 全6曲。いわゆる「ロシア四重奏曲」のひとつ。モーツアルトに感銘を与えた曲集である。

ここで**第67番 ニ長調 Hob. III:63 「ひばり」**。愛称の名づけ親は誰だろうか。前述のトーストゆかり、とされる名曲で作曲は1790年。イ長調の第2楽章アダージョ・カンタービレ、それに短調の調べをさりげなく織り込んだ後半楽章も胸をうつ。

最後は熟達のソナタ楽章(第1、第4楽章)はもちろん、スケルツォと記したいメヌエット楽章、装飾音も鮮やかな変奏楽章が聴き手を捉えて離さない**第82番 ヘ長調 Hob. III:82 「雲がゆくまで待とう」**。完成作としては最後の弦楽四重奏曲である。愛称は第1楽章の主題が同名のイギリス民謡に似ていることに由来する。曲は1799年、若き日のベートーヴェンにも手を差し伸べていたロブコヴィッツ侯爵の依頼で書かれた。ハイドンこのとき67歳。28歳のベートーヴェンも奇しくもヘ長調の弦楽四重奏曲(作品18-1)を書いていた。

(おくだ よしみち・音楽評論)